

21. 八日が満ちて幼子に割礼を施す日となり、幼子はイエスという名で呼ばれることになった。
胎内に宿る前に御使いがつけた名である。
22. さて、モーセの律法による彼らのきよめの期間が満ちたとき、
両親は幼子を主にささげるために、エルサレムへ連れて行った。
23. —それは、主の律法に「母の胎を開く男子の初子は、
すべて、主に聖別された者、と呼ばなければならない。」と書いてあるとおりであった。—
24. また、主の律法に
「山ばと一つがい、または、家ばとのひな二羽。」と
定められたところに従って犠牲をささげるためであった。
25. そのとき、エルサレムにシメオンという人がいた。
この人は正しい、敬虔な人で、イスラエルの慰められることを待ち望んでいた。
聖霊が彼の上にとどまっておられた。
26. また、主のキリストを見るまでは、決して死なないと、聖霊のお告げを受けていた。
27. 彼が御霊に感じて宮にはいると、
幼子イエスを連れた両親が、その子のために律法の慣習を守るために、入って来た。
28. すると、シメオンは幼子を腕に抱き、神をほめたたえて言った。
29. 「主よ。
今こそあなたは、あなたのしもべを、みことばどおり、安らかに去らせてくださいます。
30. 私の目があなたの御救いを見たからです。
31. 御救いはあなたが万民の前に備えられたもので、
32. 異邦人を照らす啓示の光、御民イスラエルの光栄です。」
33. 父と母は、幼子についていろいろ語られる事に驚いた。
34. また、シメオンは両親を祝福し、母マリヤに言った。
「ご覧なさい。
この子は、イスラエルの多くの人が倒れ、
また、立ち上がるために定められ、
また、反対を受けるしるしとして定められています。
35. 剣があなたの心さえも刺し貫くでしょう。
それは多くの人の心の思いが現われるためです。」
36. また、アセル族のパヌエルの娘で女預言者のアンナという人がいた。
この人は非常に年をとっていた。
処女の時代のあと七年間、夫とともに住み、
37. その後やもめになり、八十四歳になっていた。
そして宮を離れず、夜も昼も、断食と祈りをもって神に仕えていた。
38. ちょうどこのとき、彼女もそこにいて、神に感謝をささげ、
そして、エルサレムの贖いを待ち望んでいるすべての人々に、この幼子のことを語った。

39. さて、彼らは主の律法による定めをすべて果たしたので、ガリラヤの自分たちの町ナザレに帰った。

40. 幼子は成長し、強くなり、知恵に満ちて行った。神の恵みがある上であつた。

説教

イエスさまがお生まれになって八日目に、ヨセフとマリヤはイエスさまに割礼を施します。

これはレビ記 12 章の所で既に学んだことですが、女性が男の子を出産した場合には、「月のさわりの不浄の期間のように」7 日間汚れ(レビ 12:2)、8 日目に割礼をするよう教えられていることに基づいております。出産により血を流すということは、死に向かっていくことであり、それは「汚れ」た状態に置かれることを意味します。それで、この期間は、ひたすら引きこもりながら、最初の女エバが悪魔に惑わされて神さまに背き、「身ごもりの苦しみ」という神さまの呪いのもとに置かれていることの意味を考えながら、自分たちがどのように人生を生きていくべきであるのか、あるいは神さまから託された大切な子どもをどのように育てていくべきであるのかを考え続けます。

そうして、生まれて 8 日目に「神さまとの契約のしるし」である包皮の肉を切り捨てる割礼を施します。生まれながらにして死ぬほど罪深い生き方(これを聖書では『肉』という)を包皮と共に脱ぎ捨て、神の民として神と共に生きる、新しい、生まれ変わった生き方を生きるようになるのです。「きよめの期間」(レビ 12:4)と呼ばれる引きこもりの期間は、さらに 33 日間続き、合計 40 日間も(女の子を産んだ場合には倍の 80 日間も)世のつとめを離れてひたすら引きこもり、神さまと言わば「差し」で向き合いながら、人はどこから来てどこへ行くのか、何のために生き、額に汗して労するのか、自分自身と子どもの人生を神さまの前によくよく考えるのです。

イエスさまの母マリヤもそうでした。ヨセフとマリヤは御使いを通して命じられたように、生まれた子に「イエス」という名をつけます。それは「主は救い」という意味でした。

「きよめの期間」すなわち 40 日間を過ごした後、「両親は幼子を主に捧げるために、エルサレムへ連れて」行きます(22)。そしてレビ記 12 章の定めに従って、「山鳩一つがい(あるいは家鳩の雛二羽)」を捧げます。通常は、全焼のいけにえとして「一歳の小羊を一頭」、罪のためのいけにえとして「家鳩の雛か山鳩一羽」をささげるところですが、「彼女が羊を買う余裕がない」場合には、「二羽の山鳩か、二羽の家鳩の雛を取り、一羽は全焼のいけにえとし、もう一羽は罪のためのいけにえとしなさい」と言われます(レビ 12:8)。ヨセフとマリヤは貧しかったため、全焼のいけにえとして羊をささげることはできず、安い二羽の鳥を買って、一羽を全焼のいけにえとして、もう一羽を罪のためのいけにえとして神さまに捧げました。

神殿に入ると、そこで彼らを待っていたのは、シメオンという老人でした。このシメオンは、神さまを畏れる「敬虔な人」であり、神さまのみこころである律法を守り行ふ「正しい」人でありました。のみならず、彼は祖国イスラエルのために祈り、苦難の中にあるイスラエルが神さまに慰められる(別訳「励まされる」)ことを待ち望んでおりました(25)。全世界に神の栄光をあらわすべきイスラエルが、異教国ローマの植民地と化して、さらにはエドム人ヘロデに支配されながらろうじて生き延びている、この悲しい神の民の現実を何とかしてほしいと神さまに願っていたのです。そして、来たるべき救い主キリストにその希望を託していたのでした。

シメオンはいつも神と共に歩み、神さまとの息の合ったパートナーとして、聖霊に満たされた人物です。聖霊は彼の上にとどまり、救い主をその二つの目で見ると決して死なないと聖霊のお告げを受けていました(26)。そして、その日もやはり「御霊に感じて」宮に入ると、実に、幼子イエスを連れた両親が神殿に入ってくるではありませんか。おそらく大勢いたであろう参拝客の中から、人を身なりや身分で判断せずに、貧しく幼い

彼らを見つけ出したのは、まさしく神わざと言うべきでしょう。神を畏れ、みこころを行って、いつも神と共に生きているシメオンであればこそとも言えます。

シメオンは幼子のイエスさまを抱き、神さまをほめたたえて言います。

29. 「主よ。

今こそあなたは、あなたのしもべを、みことばどおり、安らかに去らせてくださいます。

30. 私の目があなたの御救いを見たからです。

31. 御救いはあなたが万民の前に備えられたもので、

32. 異邦人を照らす啓示の光、御民イスラエルの光栄です。」

今や天に召されること間近に迫る老シメオンは、イエスさまを見ながら「あなたの救いを見た」と言います。そして、「安らかに去らせてくださいます」と言うのです。「安らか eivrh,nh」はヘブル語「シャローム~Alv」の訳語で、完全に神とも人とも和解し、平和で満ち足りた天国のような状態を意味します。つまり、イエスさまを見た瞬間に、シメオンは神さまの救いを見て、シメオンの中に神の国の平和が訪れたのでした。さらに、その幼子が、シメオンに救いと御国の平和をもたらすのみならず、「万民」の前にも救いが備えられている、とシメオンは言います。幼子こそは、ローマ帝国も含めた全世界の「異邦人を照らす啓示の光」であり、「御民イスラエル」にとっては、彼らとその光を受けて全世界に神の栄光をあらわすところの光源なる「神の栄光」そのものであると言うのです(31~32)。

私たちは、神に靈感されて歌ったこのシメオンの讃歌から学びたいと思います。このシメオンの讃歌によれば、まず、イエス・キリストは救いそのものであります。今も大勢の人々が救いを求めて古い師のところに相談に行きます。スピリチュアル・カウンセラーなるいかがわしい人物の助言を求めてテレビを回し、本を読みあさりまです。テレビでは朝から占いが放送され、テレビによく出る某占い師などは、ケータイ占いの収入だけでも月に数億の収入があるそうです。人々は救いを求めて神社にお参りに行き、この世に氾濫する様々な宗教を信仰します。救いはどこにあるのでしょうか。この世に私たちの救いはどこにあるのでしょうか。救いはキリストにあります。キリストが救いそのものです。キリストを見た者は、救いを見たのです。反対に、キリストを見ない者は、救いを見ていません。

この時代、神殿には多くの参拝者が溢れていたことでしょう。パリサイ人、律法学者、さらには神殿祭司であるサドカイ人らが神さまを礼拝しておりました。それなのに、誰もイエスさまの所に来ません。神殿に向かって一生懸命に礼拝しているのに、イエスさまには礼拝しません。彼らは、イエスさまに尻を向けて、神殿の本堂に向かっていけにえをささげ、祈りを捧げているのです。イエスさまこそは、その神殿の本尊、本体、中心、神そのものであられるお方なのです。神殿で礼拝すべきは、このイエスさまです。神殿で祈りを捧げるべきは、このイエスさまです。神殿でいけにえをささげるべきは、このイエスさまです。私たちの切なる祈りに答えてくださるのは、このイエスさまなのです。イエスさまが神の栄光そのものであられます。イエスさまこそが、神ご自身であられるのです。イエスさまが、私たちをお救いくださいます。イエスさまが、私たちに平和をくださいます。神の国を、永遠のいのちを、罪の赦しを、そして、神との平和をくださるのです。イエスさまが、私たちを守り、助け、導いて、天国に入れてくださるのです。世界に住む生きとし生けるすべての民は、このイエスさまを光として生きるべきです。イエスさまという光に照らされて、自分の罪を悔い改めて、生きるべきです。

そして、このイエスさまこそは、御民イスラエルの光栄です。「光栄」と訳されていますが、「栄光」と同じです。イエスさまが「栄光」なのです。「神の栄光」です。神殿に現れた、あのシェキナの栄光です。神の臨在の光です。その光の中心にいますお方です。光そのものであられます。このお方に照らされる時、人々は罪を宥されます。自らの罪深さを思い知らされます。そして、どのように生きるべきかを教えられるのです。全世界に

神の栄光をあらわすべく世に遣わされているイスラエルは、このイエスさまを光として生きるべきです。イエスさまを証しし、神さまのみこころを行って、イエスさまが生きたように生きるべきなのです。そうやって、キリストの栄光を、神を知らないこの暗い異邦世界にあらわして生きなければなりません。イエス・キリストは救いそのものであります。イスラエルは、キリストを宣べ伝え、キリストの御心を全うして、キリストの栄光をあらわして生きるべく、全世界に遣わされています。

しかし、続くマリヤに語られたシメオンの言葉によれば、このような人生は、必ずしもただ楽しいだけのものではないことが理解できます。

34. また、シメオンは両親を祝福し、母マリヤに言った。

「ご覧なさい。

この子は、イスラエルの多くの人が倒れ、

また、立ち上がるために定められ、

また、反対を受けるしるしとして定められています。

35. 剣があなたの心さえも刺し貫くでしょう。

それは多くの人の心の思いが現われるためです。」

これによると、キリストは万民に受け入れられるのではなく、半分は受け入れられつつ、半分は迫害にさらされることとなります。このことば通り、この後、しばらくすると、ヘロデの刺客がベツレヘムに追っかけて来て、命からがらエジプトに逃亡することとなります。お金もないのに。何とか東方の博士たちから「黄金、乳香、没薬」をもらって、それを軍資金にして、かろうじて逃亡しました。ヘロデが死んで、ガリラヤに戻って、公生涯に入ったと思ったら、その宣教の当初から権力者にいのちを狙われました。あちこちで迫害され、とうとう最後は捕まって、十字架に磔にされて、殺されます。

イエスさまがそうされるところを、生まれた時から死ぬまで、イエスさまを、その全生涯にわたって見続けたマリヤも、そのとばっちりを受けて、やはり、同じように迫害を受けて、剣で殺されそうになり、「剣によって心さえも刺し貫かれる」生涯を生きることとなります。でも、そのように「剣によって心さえも刺し貫かれ」ながらも、マリヤは自らの信仰の生涯を全うしました。これは、キリストと共に生き、キリストの栄光をあらわして生きる者の宿命です。

私たちの主イエス・キリストは、十字架をものともせず、御心を全うして死に、復活なさいました。そのキリストによって永遠のいのちをいただいた私たちも、あらゆる迫害と困難に耐えて、御心を全うし、この罪の世にキリストの栄光をあらわして生きていきたいと祈ります。